

『一切設利羅集』零本、影印・解説

牧野和夫

はじめに

ここに全文を影印し簡略に書誌的な紹介を試る書物は、山岸文庫の蔵する古写の一本である。内題に「一切設利羅集巻第□四 大江親通撰集」とあり、これを信ずるならば、平安後期の儒者大江親通の撰した『一切設利羅集』巻□四の零本一帖であることが知られる。

大江親通の閏歴は、『本朝新修往生伝』に次の如くあり、概ね知ることができぬ。

〔四一〕学生大江親通者。左京人也。為人質朴少文。然猶能草書。家無産業。恬澹。養〔譚卷〕性。雖身接俗間。而心歸仏界。道俗男女。志在菩提之者。不論上下。不謂老少。固〔固辭〕締金蘭之交。唯〔虫損。内本〕談白蓮之縁。衣服飲食。随求給仕。

語親友曰。我等〔不〕值正法。生在濁世。冥々生死。出離何日。彼双樹花落。栴檀煙尽以來。時累千祀。境隔万程。当于斯時。若得礼釈尊之舍利。即為見如來之全身。故發別願。欣求舍利。經論中若有説舍利功德之文句。抄而集之。遠自天竺。近至日域。視聽所觸。莫不記錄。合為三十卷。名曰駄都抄。更語人曰。舍利神變。近在室中。先年我披一文函。得六丸玉。大如小豆。其色黯然。人以〔知〕。為自然物。或曰。似仏舍利。祈而知虛実。即安仏前。屢供養香花。漸歷日月。玉増員〔虫損〕。内本〔数〕。其貌微少。其光照耀。已表瑞相。遂知其実。若有欣求之人。依請施与。把而不尽。其数如本。或時隨取相連。如以糸貫珠。神變化可謂奇異矣。或有貴〔虫損〕。内本〔女〕。道心純熟。早帰仏道。已為禪尼。〔虫損〕。内本〔中納言息女。号之尹。尼。上。〕〔虫損〕梵行積功。世間無比。保安之比。忝彼顧問云。我室中仏壇上。舍利出現。殊動感懷。翌日夢中。有人示曰。早命親通。聞知舍利之本縁。流布世間。同得利益。夢覺問之。不知其人。或僧云。親通者洛都人也。字江榮是也。室在大内寮。〔正親町櫛匣小路辺〕後日尋到其所。適謁其人。親通忽承禅命。成希有思。殊凝信心。奉請舍利。事之嚴重。默而不罷。知識衆人。奉造金色二尺五寸釈迦仏像。〔二尺寸五者擬。〕〔虫損〕。内本〔二十五有也〕。像中安舍利。以為仏全身。見聞隨喜。都人成市。隨力所堪。供養布施。親通発願曰。以此惠業。廻向法界。与諸衆生。同成仏道。滿座聞之。歡喜信受。皆垂涙曰。不図今日復〔値〕如來之教化。親通德行如是。誰敢間疑。然自至少老。称念弥陀。每日六万返。以之為勤。暮年出家。〔失名。〕〔虫損〕具足淨戒。勇猛精進。油〔虫損〕鉢不傾。仁平元年十月十五日卒去。臨終正念。得〔虫損〕極樂迎。紫雲正聳。白日見之。

〔岩波思想大系『往生傳法華驗記』に拠る〕

即ち、本零本は、經論中から天竺・震旦・日域の舍利（設利羅、駄都とも）に関する一切の文献を蒐集・記録した『駄都抄』三十巻の零本にあたるものか、と考えられる。従つて、鎌倉期の聖徳太子伝記資料に逸文を見る「扶桑設利羅集」

との関係が、又考慮されねばならないのである。「扶桑設利羅集」の逸文は、管見の限り、次の如し。

『四天王寺古今目録抄』の引用文によれば、

a 「一舍利事／扶桑舍利集云法隆寺佛舍利一粒白色如小□^{〔角〕}」豆許^{〔性〕}・納銀壺^{〔性〕}・舍利安上宮王院寶藏^{〔性〕}・太子／自胎内奉^{〔性〕}掌^{〔性〕}御誕生後尚以不開二歳之時／春向東方^{〔性〕}・稱南无佛^{〔性〕}之時自掌中^{〔性〕}・給也^{〔性〕}」(尊経閣文庫蔵本に依る。以下同じ。)

b 「日本記云設利羅集曰天王寺金扶堂佛舍利三粒白／色二粒黄色一粒云々」

c 「一御舍利事／……是、扶桑集ノ御舍利三粒白色二粒黄色／一粒トアル……」

a の引文は、若干の異同を伴いつつ『聖徳太子傳玉林鈔』(従つて『金玉抄』にも)にも存する(e)。「玉林抄」の引文は次の如し。

d 「裏書云扶桑舍利集云大野岳者今豊浦寺東佛門之處也今元興寺是也云々」(卷四吉川弘文館刊影印本に拠る。以下同じ。)

e 「扶桑設利羅集云法隆寺佛舍利一粒白色大如小角豆許^{〔性〕}・銅壺^{〔性〕}・佛舍利安^{〔性〕}・上宮王院寶藏^{〔性〕}・聖徳太子自胎内^{〔性〕}・奉^{〔性〕}掌^{〔性〕}・御誕生之後尚以不開二歳之春向東方^{〔性〕}・稱南无佛^{〔性〕}之時自掌中^{〔性〕}・所落給也東大寺^{〔性〕}・西室^{〔性〕}・住僧延喜上人^{〔性〕}・説也云々」(卷二31ウ)

以上の他に徳島本願寺蔵『聖徳太子伝暦』等にも引文あるが省略。a から e までの引文で注目すべき点は、b の引文、「日本記云」を冠して引用されることである。この「日本記」は、おそらく、平安末・鎌倉初頃の成立と覚しいもので、「中古」の「日本記」を考慮臆測する上で貴重な一條であろう(牧野「事相書・口伝書にみる『日本記』・平基親のことなど」・覚書)『実践国文学』33号昭63・3刊)。a から c の引文を収める『四天王寺古今目録鈔』は、別称を「提波羅惹秘決」とも云い、正應四年釈了敏写の一本を前田育徳会尊経閣文庫が蔵し、本奥に「嘉祿三年^{〔二二七〕}」「天王寺東僧房」にて「書之」とあり、嘉祿三年以前の成立は確実である。即ち嘉祿三年以前に「扶桑設利羅(舍利)集」「設利羅集」は四天王寺あるいは南都に流布していたのである(『四天王寺古今目録抄』は、同じく親通撰の「巡礼〔私〕記」をも引く)。

果して「扶桑設利羅集」は、いかなる書か。三国にわたる「一切設利羅集」のうちから「日域」の記事のみを抄したものか、あるいは、「一切設利羅集」の影響下に著わされた全くの別書か。今後の課題である。

ところで、山岸文庫に該本の臨写本一本が存し、他に臨写本一本を家蔵するが、いずれも近代（昭和）の臨写にすぎない。誠に天下の孤本と称して誤らないものである。しかも、料紙・字様等から見て鎌倉初期頃と覚しい写本であり、撰述時に近い頃の書写として扱べき最善のテキストでもある。内題下方の本文同筆の「大江親通撰集」も、かなり信憑性の高いことが知られる。本文庫貴重本中の尤物の一つに数えるべきであろう。

既に一部の識者の知るところであったが、本格的な紹介は、管見の限り未だ見ない。ここに影印に附して全貌を公刊する次第である。以て、本邦の舍利信仰の盛時（鎌倉期の広汎な信仰へ到る魁としての）をうかがうに足る資料として、又、新たな平安後期の儒者の数少ない撰述書の一つとして、評価・活用されることが今後に望まれる（「節略」・「取意」などが、当代の学問の有力な領域を占めていたことは既述。異伝発生の淵源の一つであったことにもふれた。本零本一帖のもろもろの問題は翻印と併せて『実践国文学』35号に記す予定。参照下されば幸甚）。

書誌は次の如し。

「一切設利羅集」^{〔十之〕}存卷〔四〕 題大江親通撰

大一帖

朽葉色包背表紙（二四・四×一四・一糎）、中央打付に「一切設利羅集卷^{〔第〕}四 現在利益部」〔 〕の二分分は、第一字の第の半ばと第二字分の高さ約一・一糎が削り擦消される）と墨書、その下に同筆にて小題を「衆病削除 現世安穩／所求圓滿 珍寶出生／變如意珠 化作五穀／惡世利益 罪障消滅」と墨書。右下隅に「辰」と別筆墨書。その上に「荒」と朱書あり、表紙左端に「押へ竹」の名残と思われる細い竹棒を包むが、平安後末期から鎌倉時代前期頃に見かける装訂

である。見返しより内題、目録と続き、二丁表六行目より本文。但し、見返しより三丁裏迄の書風は、四丁表以降のものとやゝ異なるように思われる。単辺(二二・〇×一・六糎)有界七行(界幅約一・六糎)の押界を施し、行十九字内外、裴紙系の交漉紙か、粘葉装、両面書。墨の訓み仮名・送り仮名(本文とはゞ同時期、同筆か)、朱の。。を以て毎篇題、。を以て毎小題の頭に標する。朱の断句・ヲト点を施す部分もある。朱墨両様の見せ消チ、左右に校字傍記。終丁表の本文末を一行残し、その裏一行目に尾題「一切設利羅集卷第□四」と墨書。印記は巻首に「智/城」(双杵朱文印1.×6糎)。

後代の貼紙墨書(おそらくは、田中教忠氏の手)は、左の如し。

四十丁裏、本文「類聚國史卷第七十云」に係り、「類聚國史卷第七十 今世缺失不傳天長四年五月辛己 丙戌/兩條日本記畧載之是以日本後紀文類聚國史卷第七十所載可/證知矣」と。傾聴に値する見解であろう。

他に後見返しに、貼紙あり、明治十七年二月廿三日の田中教忠氏の手に係る引書目(従って、私に作成した引書目は、敢えて掲げない)並びに「元亨積書」の引文等があるが、影印に譲る。又、途中「尊鈔上」と裏書した「天魔」の注記一紙を挟む。

本零本一帖は、影印に見る如く篇題の擦消、小題の擦消重書、貼紙墨書による訂正、目録への小題の小字補入など、一見すると草稿段階の様相を呈するが、大江親通の手に係るものとは現時点では考え難く、おそらく、鎌倉初頃の書写、あるいは、平安末期に遡るものか、と思われる。こうした訂正箇所のみを考慮するならば、後見返し貼紙識語の如く「作者在世之時手書者乎」との見解の生ずる点もあり、強に否定しきれないところも残るのであり、巻次の「□四」の一字分割り擦消したことの意味と併せて今後の究尋すべき課題である。

なお、ヲト点の施された箇所から帰納できる点図は次の通りである。

